



Don't Look
Back in
Anger



本島 としや

あきれくらいに秋の虫が騒々しい。

僕は、夏のあいだに好き放題成長した雑草の空き地で立ちすくんでいた。

錆びついた鉄柵が張り巡らされていて、どこからかガラスの割れる音が聞こえていた。風に運ばれたピアノの練習曲が、軽やかなリズムを刻んでいる。草の擦れる音もかすかに混じっている。

太陽は傾いていて、生暖かい風に包まれている。

はっと今は夕方なのだと気がついた。

僕の目の前には、得体の知れない、ラグビーボールに似た形の金属の塊が浮遊している。ぬらぬらとした鏡面状の表面には、空き地の草や土が映りこんでいる。同時に僕の顔も。

移りこんだ僕の顔を見て、ようやく僕は何者なのかを考えた。僕は目の前の光景以外に記憶がないと気づいて、あたりを見回した。

正直ここがどこなのか分からない。

空中に待機する奇怪な金属塊は、一言も物を言わず、滞空しているのが仕事であるかのように、僕の前に居座り続けている。

ああ、僕はやっぱり記憶がないのだ。何もかもを忘れてしまった。それどころか、目の前に起きている出来事を理解できない。理解することさえ不可能ならば、僕はどうすればよいのだろう。

意識は確かだ。けれど僕は何も覚えていない。言葉を話せるかさえあやしい。

もう一度金属に映った自分の顔を見て、何かを思い出そうとしたが、無駄な努力であった。分かったのは、右の目じりから血が滴っていることだけだった。流れる血を見て、急に傷口がヒリヒリと傷む。

シャツの袖で血を拭いながら、考える。

誰かに殴られたのだろうか？ それとも自分でつけた傷なのだろうか？

たとえば僕は既に死んでいて、幽霊になっているのだとしたら、誰かの枕元に立つことくらいできるのだろうか？ 誰かの枕元へ移動しようときばってみたが、知り合いの顔なぞ誰一人も思い出せなかった。だからどこにも移動できなかった。

力を解いてみた。体の感触は確かにあるので、僕は恐らく生きている。

頬を触り、腕を撫でて、首を回した。何も異常はない。血が出ている以外は。

それにしても、この金属は異常なものだ。なぜかは分からないけれど。

金属はどこにもつなぎ目がない。完璧な楕円である。

触れてみると、冷めたグラスワインみたいな心地よさだ。

ふと金属には意志があるのではないか、と思った。

人間の鼓動によく似た振動が、指先から感じられるからだ。僕が金属に溶け込んでいき、次第に一体化していく。金属に取り込まれて、もはや僕が人間なのか金属なのかあやふやになる。

そうして初めて、金属の持つ意志が理解できる気がした。

手を離して、金属塊に背中を向ける。

僕の知らない街が広がっている。あらゆるものを僕は知らない。古臭い屋根瓦の通りも、薄汚れた塀の落書きも、荷車を引いて歩く老婆の姿も、街全体に広がる空気の香りさえも。

僕は誰だ？ 僕はこいつを知らない。

ちょうど正面には交差点があって、黄土色の信号機が明滅している。横断歩道の塗装は剥がれ落ちていて、わずかに剥がれ残った塗装だけが、横断歩道があったことを物語っている。

二十歳前後の若い女性が、僕の顔を見て手を振った。知り合いであるかのように。

僕は思わず愛想笑いをして、手を振り返した。僕はこの女性を知らない。

彼女は駆け寄ってきて、小さな袋を手渡した。

「――それね、さっきおやつに買ったの。家で食べようと思って。キシマ屋のケーキ。好きでしょ。あげるよ。久しぶりだしね。コウサカクン。三ヶ月ぶり？ 最後に会ったのは、まだ夏の初めごろだったよね」

彼女は秋にしては薄めのワンピースを着ていた。歩きやすそうな運動靴を履いている。左手には買い物帰りなのか、買い物袋を提げている。隙間からネギやジャガイモが見える。歩いて買い物に出かけるとは、家が近所なのだろう。

綺麗な顔立ちだ。屈託のない笑顔が、美人の秘訣であろう。絶世の美女ではないが、引き寄せられる不思議な魅力を持っている。生まれたてのようなキメの細やかな肌に、肩まで伸ばしたやわらかい髪が揺れている。

僕は彼女の名前すら知らない。

漠然とした思いだ。直感だと言えば、そうなのだろう。

僕は、記憶を無くしたことを悟られてはいけないような、わけの分からない強迫観念に囚われた。知られてしまうと、もう取り返しがつかないんじゃないか。僕が僕であるためには、黙っていなければならないのではないか。

不思議にも、罪に似た意識を感じる。

ルールを破る気がする。誰と交わしたルールなのかさえ、今の僕には思い当たらないが。

「さぁ行こうよ。ぼんやり立ってないでサ。あと一時間で始まっちゃうよ」

彼女が僕の袖を引く。

「始まるって？ 何が？」

思わず聞き返すと、彼女は――どうも僕の発言を冗談だと思ったらしい。からかわないでよ、と笑いながら、

「誕生日でしょ」

「誰の？」

「コウサカ クンの。――だからケーキ買ってきたのに」

誕生日の会場は僕の家らしい。好都合だった。自宅に帰れば、僕について何か分かるだろう。

同時に、彼女が何者なのかも分かるだろう。まだ名前すら知らないが、彼女が僕を知っている分、いまさら名前を聞くのは失礼な気がする。

僕らは商店街を横断する。寂れた商店街は、シャッターの降りている店ばかりで、行き交う人にとっても、ただの通過点でしかないようだった。誰も町の姿を見ようとしていない。我先に歩いていくだけである。

「大丈夫？」

彼女は下から見上げるように、僕の目を真っ直ぐ見た。

さすがに僕の動きが不審だったのだろう。しかし何も覚えていない僕が、僕の置かれた状況に先手を打つには、あまりにも情報が少なすぎる。

彼女は少し眉を困らせて、

「本当に大丈夫？」

言うしかあるまい。僕には記憶が無いのだと。そうすれば、たぶん、楽になる。吐いてしまえば、聞きたいことを聞けるし、自由に動ける。明文化されたルールがあるわけではないのだ。

ただ、僕の脳みその奥にくすぶり続けている、『記憶喪失を悟られてはならない』という鎖だけを取っ払ってしまえば、解決するのだ。

「ああ、気づいた？ 実は――」

僕には記憶がない。

「そりゃあ気づくよ！ どうしたの？ その血は！ 何があったの？」

少しだけ胸を撫でおろす自分がいた。

彼女は僕の傷口を、ティッシュで拭ってくれた。幸いにも傷は深くない。

「ああ、ありがとう。ごめん」

「で、何があったの？」

「うん。さっき足をくじいてね。転んだんだ」

「そう。気をつけてね」

彼女はもう分かっているのだろう。僕が嘘をついていることを。けれども、あえてそれ以上突っ込んで聞こうとはしなかった。

僕らは住宅街に入った。たぶん僕の家も近いだろう。けれど、僕にとっては初めて旅をする街と同じだ。すべてが新鮮で、すべてが好奇心の対象になる。

道中、彼女はしゃべり続けていた。話題からして、彼女は大学生らしい。すると、僕も似たような年齢であろう。

僕は適当に相槌を打っていた。突然聞かされる話題のほとんどは、理解できなかったし、僕の脳味噌は活動してくれなかった。

具体的な内容のほとんどは頭に残っていない。

ただ、僕は三ヶ月前、仲間内に、旅に出ると告げたきり、姿を消していたらしい。僕はどこへ旅立ったのかまるで記憶がないけれど、旅の途中で、きっと何かが起きたのだ。

*

僕の家は、大学生の住むようなアパートであった。

六畳の部屋に四人の男女が食事を用意して待ってくれていた。近所のスーパーの惣菜を買い集めたようなラインナップだ。フライドポテトやから揚げ、サラダ e t c。スナック菓子と、何種類かのお酒も用意されていた。

テレビには漫才師が映っていた。僕らが部屋に入った時、彼らは漫才を見て、笑い転げていた。

窓が開いていて、カーテンがばさばさとはためいている。秋の夜風の通りが良い。

ぱっと部屋を見回して、僕の身の上に関するものが無いか探してみたが、すぐに結び付けられるものは無かった。

部屋のまんなかにコタツ机があって、奥に小さなテレビがある。三冊の本が部屋の隅に詰まれている。服は衣装ケースの中に入っているのだろう。服をしまうにちょうど良いプラスチックのケースが、部屋の角に置かれていた。

押入れは開かれていて、布団が畳まれていた。

生活に必要なもの以外は極力排された部屋であった。まるで監房である。閉ざされた黒塗りの鉄格子や、僕を監視する誰かがいないと言うだけで、この部屋は牢獄そのものだと感じた。

僕はなぜこんな部屋で暮らしていたのだろう。誰かと撮った写真一枚すらない。僕の部屋でありながら、僕自身を完全に否定している部屋だ。

今だって僕が――僕の気持ちとしては――初めて入った自分の部屋には、既に四人もの先客が、僕の部屋に居座っていたのだから。まったく他人の家である。

僕と彼女は空いている席に座った。

ケーキをテーブルに並べて、蝋燭を突き刺す。ローソクの数数を数えていたら、僕は二十一歳なのだと知った。

でも、それだけだった。

途端に僕は可笑しくなった。腹の底から笑いがこみ上げてきて、笑わずにはいられなくなった。あははは.....可笑的ではないか！ 僕自身は誕生日どころか名前すら知らないのに、僕の誕生日を祝おうとしている皆は、僕のことを僕よりよく知っているのだ。あはははは.....。

僕はたった今自分の年齢を知っただけの男だ。それから、手入れのまったく行き届いていない、放置された空き地の真ん中で、風に吹かれて立っただけの男だ。馬鹿馬鹿しい。こんな馬鹿馬鹿しい話があるか？

僕はあまりの可笑しさに床を転げた。腸がねじ切れるようだ。止まらない。からからに乾いた砂漠を放浪して、ようやくたどりついたオアシスで水を飲む気分。止め時が分からない。手足をバタバタさせて、芋虫のようにくねくねと体をねじりながら、狭い部屋で笑い転げる。あははは.....。

皆は怪訝そうな顔をしていたが、つられて笑い出した。わけも分からず笑い出した。テレビでは漫才師も多くの笑いを取っていた。実際彼らは洒落のきいた面白い漫才をしていた。観客が大笑いしていて、僕の部屋はもはや笑いの渦である。

熱を出した。僕は気味の悪い汗を掻いていた。

笑いの欲望が去ると、今度は急に脱力した。疲れて動けなくなった。

ああ。窓の向こうでは自転車のギコギコと軋む音が聞こえる。散歩中の老夫婦が楽しそうに話をしている。風に煽られたカーテンが勢いよく広がった。金属の擦れる、がしゃああという音を立てながら。ああ。あははは.....。

水の流れる音が聞こえた。よく反響している。下水だろう。あはは。下水を水が流れているのだ。

丸い黒ぶちメガネをかけた、博学そうな男が、立ち上がって、室内灯のスイッチに手を掛けた。

メガネの男は皆から『オクロク』と呼ばれていた。

部屋は真っ暗になった。

「誕生日おめでとう。勢いよく消してくれよコウサカ」

言いながら、オクロクは蝋燭に火をつけていく。急にみなは神妙な面持ちになった。蝋燭の影が、ケーキの上を伸びていて、意図不明の沈黙が、部屋全体を緊張させた。

風の音が強い。強い風が吹いている。蠟燭の炎は頼りなく揺れている。

浮かび上がる友人たちの顔を見ていたら、僕は――、

不思議な光景を見た。

――暗い部屋だ。たぶん僕の部屋だ。僕らが座っているこの場所だ。

でも時間が違う。今とは別の時間だ。いつだろう。夜なのは間違いない。

布団が敷かれている。掛け布団はめくられていて、扇風機のモーター音がうわんうわんと唸っていて、ゴミ収集場を食い散らすカラスがぎゃあぎゃあと鳴いている。掃除をしたことのない傘付きの室内灯が、天井からぶら下がったまんま、左右に揺れている。

布団には人間が横たわっていた。長くて綺麗な髪の毛が、ばらばらと広がっていた。女の子である。

うつ伏せで、眠っているようだった。両腕を胸の下において、顔をまくらにうずめている。寝巻き姿でじっと動かない。腰の辺りに薄い布団がかかっている。

首を振る扇風機が、横たわる女性をくまなく撫で回し、ついでに僕に風を分けてくれた。静けさがゆえに、羽の回転音が、部屋を満たしているのだ。彼女は呼吸をしていない。

――近寄って確認したわけじゃないが、動物的な直感だった。

クリムトの絵画を見ているみたいだった。あの、耽美な世界のどこかに、そっと置かれている狂気染みた死の匂い。絵画の登場人物たちが、もしも生きているのなら、僕が目を話した瞬間に、全員死んでしまうのではないか。だから、絵から目を逸らせないし、僕も目を逸らさない。少なくとも僕が見ている間は、彼や彼女は生きていられるのだから。

僕は布団で横たわる彼女の名前を呼ぼうとした。しかし、喉まで出掛かっている名前は、ついに姿を現さない。

必死に考えても無駄であった――。

白昼夢は唐突に幕を引き、

炎が揺らいでいる。僕は大きく息を吸い込んだ。

ふっと思い切り息を吹いて、蠟燭の火を消した。炎は嘘のように掻き消えて、直後に盛大な拍手が沸き起こった。

おめでとう、と祝福されたが、まるで他人事のように思えてならなかった。変な胸騒ぎがした。

この部屋の中に本当の僕が潜んでいて、静かに呼吸をしているのだ。そうして、気づかれないような物影から、僕自身を眺めている。真に不安なのは、その架空の僕自身の視線が、背中をそっと突き刺している気がしたのだ。僕の友人たちは僕を祝福するが、僕は、物陰に身を隠している誰かへ、受け取った祝福を返さなければならない――。つまりは、本当の僕へ。

僕は後ろを振り返った。暗闇の中おぼろげに浮かび上がるのは、少し汚れた壁だけだった。

「ユウカがここに居てくれたらね。きっと大喜びなのに」

マヤ――僕にケーキを買ってくれた彼女――が、しんみりと呟いた。

「マヤ。居ない人を――亡くなった人の話をしてもしょうがないよ。まだあの事件から三ヶ月しか経っていないんだよ。それに、コウサカ クンだって、旅から帰ってきたばかりだし、気持ちの

整理がついてないかもしれないし」

ショートカットのさばさばした感じの女の子が言った。

「ミサカ、ユウカが殺されたのは、ここにいる誰にとっても悲しいことだよ。みんな、ユウカのことを好きだし。犯人だって見つからない不安な状況なのも分かる。けどさ、やっぱりユウカにはここにいて欲しかったんだ。それだけだよ。ユウカについて話をしないのは、ユウカが生きていたことを忘れていくプロセスのような気がして――」

「わたしだってさ、忘れたことなんてない――けど今は、やっぱり、ユウカの話は無しにしようよ」

ミサカと呼ばれた女の子は、マヤの肩を軽く叩きながら言った。残念そうな、神妙な面持ちであった。

ユウカー――ユウカー――。マヤとミサカの話し振りからすると、僕とそれなりの仲であったのだろう。